

---

# 花火

金弘 美樹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

花火

### 【Nコード】

N4820F

### 【作者名】

金弘 美樹

### 【あらすじ】

佐藤から花火大会に誘われた高木は・・・ラブラブでスイートな高佐の物語です。

## 1・お誘い

「ねえ、涉くん。今日花火見に行かない？」

佐藤からの誘いを受けたのは、聞き込みの最中に立ち寄った定食屋でのことだった。

余りに突然の事だったので、高木は面食らってぱちくりと瞳を瞬かせる。

「この調子だと2人とも早く上がれそうだし。ね、いいでしょ。」

佐藤は遠足前日の子供のように瞳を輝かせて高木を覗き込む。

その仕草が余りに可愛らしくて、高木は耳まで真っ赤になった。

「ダメ、かな？」

なかなか返事をしない高木に向かって佐藤は悲しそうな顔で首を傾げる。

慌ててぶんぶんと首を振ると、

「行きます！喜んでお供させていただきます！」

高木は身を乗り出して答えた。

その勢いに圧倒されたのか、あはは、とかわいた笑みを浮かべた佐藤は、

「よかったあ。じゃあ、仕事が終わったら家に来てくれる？」

と瞳をくりくりと動かしながら、上目使いで高木を見る。

「あれ？花火見に行くんじゃないんですか？」

腑に落ちないといった顔で尋ねると、

「ん。お母さんがね、もし花火を見に行くんだったら浴衣着せてくれるって言うから。」

佐藤は照れ臭そうに、しかし嬉しそうに微笑んだ。

「浴衣なんて滅多に着れないじゃない？」

鼻歌でも歌い出しそうな弾んだ声で話す佐藤があまりにも無邪気な笑顔を向けるものだから、高木は思わずくすくすと笑う。

「なによお。」

そんな高木のリアクションにむつと唇を尖らせて、佐藤は不満げな目を向ける。

くるくる表情を変える佐藤に、高木はにこにこ笑いながら答える。

「いや、可愛いなあと思って。」

その言葉に、今度は佐藤の頬が真っ赤に染まった。瞳をぱちぱちとせわしなく瞬かせ、火照った頬を落着かせるように両の掌で包み込む。そして、上目使いで高木を睨みつけると、

「馬鹿じゃないの。」

と小さく抗議する。

高木は相変わらずにこにこ笑いながら、

「思ったことを言っただけですよ。」

しれっと答えて、辺りをちらりと見回してから、くしゃりと佐藤の頭を撫でる。

もう、犬じゃないんだからね。などとぶつぶつ文句を言いながらも、佐藤はまんざらでもないといった表情で高木を見る。

「じゃあ、行きましようか。早く聞き込みを終わらせてしまいたいです。」

高木が促すと、さっきまで甘くとりけていた佐藤の表情が、みるみる刑事の顔に変わる。

2人はどちらともなく立ち上がると、定食屋を後にした。

## 1・お誘い（後書き）

高佐はやっぱラブラブなのが一番！美和ちゃんに振り回されながらも惜しみない愛で美和ちゃんを包み込む高木くんと、高木くんだけに見せる奔放で愛情深い美和ちゃんのお話を書いていきたいと思っています。感想お待ちしております。

## 2・逃げる！？

「じゃあ先に帰ってるから、終わったら家に来てね。」

佐藤は周りの目を気にしながら、高木の耳元にそつと囁いた。

高木は声もなく小さくこくりと頷く。

それを確認すると、佐藤は満面の笑みを浮かべ、

「じゃあお先に。」

と急ぎ足で駆けていく。

小さく手を振りながら佐藤の後ろ姿を見送ると、高木は再び机の上の資料に目を落とした。

実際のところ仕事はすでに終わっていた。帰り支度も済んでいたはいるのだが、佐藤と一緒に退庁するのは憚られた。

そんなことをしようものなら、間違いなく尾行を付けられるか、取調室に連行されるか、とにかくデートどころではなくなってしまうのは、今までの経験から嫌というほど分かっているからだ。

せっかくのデート、しかも、滅多に見ることのできない浴衣姿の佐藤とのデートを台なしにされたくはない。

高木は手元の資料とにらめっこしながら、時折ちらりと周囲の様子を伺い、その時を待つ。

相手は百戦錬磨の刑事達だ。はやる気持ちを悟られないよう細心の注意を払いながら、周りに気付かれないようにちらりちらりと視線を巡らせていると、その時は以外と早くやってきた。

人影がまばらになったその一瞬を、高木は見逃さなかった。

「お疲れ様です。」

申し訳程度の挨拶を残し、逃げるようにそつと部屋を出る。

ゆつくりとドアを閉めて、背筋を伸ばし何事もなかった風を装いながら、ゆつくりと廊下を歩く。

誰も気付いてくれるなと願いながら廊下を曲がり、1課のドアが見えなくなつたのを確認すると、高木は一気に早足になった。

ホールでエレベーターを待つ間でさえ、誰かに見つかったらと思うと緊張してしまう。

背中をだらりと嫌な汗が伝う。

しかし、高木の緊張とは裏腹に、高木はエレベーターに乗り込むまで、1課の誰とも会うことはなかった。

エレベーターのドアが閉まった瞬間、高木の口から深い安堵の溜め息が零れる。

よかった……今日はツイてるな、オレ。

高木は鼻歌を歌いながら、本庁を後にした。

## 2 逃げろ！？（後書き）

高木くん、佐藤美和子絶対防衛線の目を盗んで逃げちゃいました（笑）今回は無事にデートできるんでしょうかねえ。



### 3 ・それで良いの？

何度も来たことがあるはずなのに、未だにインターホンを押す時は緊張してしまう。

佐藤の家のドアの前で、お決まりのように少し躊躇した高木は、大きく深呼吸すると、覚悟を決めてインターホンを押した。

ややあつて、はあい、という返事と共にがちやりとドアが開く。

「いらっしやい。思ったより早かったわねえ。」

佐藤と目元がそっくりな彼女の母親が、玄関先で高木を出迎える。

「あ、はい、すみません。早過ぎましたか？」

高木はぎこちない笑顔を浮かべながら尋ねる。

「美和子ね、今お風呂から上がったばかりで、まだ着付け終わってないのよね。でもちようどよかったわ。」

母はそう言つてにつこりと微笑むと、

「高木くんも、お風呂入ってらっしやい。」

とあっけらかんと言う。

「ええええっ！ば、僕も、ですか？」

予想もしなかった言葉に、高木は鳩が豆鉄砲でも喰らったように、目を白黒させる。

そのリアクションがよっぱど面白かったのか、佐藤の母はけたけたと声をあげて笑った。

「そうよお。実はね。美和子の浴衣を探してたら、主人が昔、美和子とお祭りに行った時に着てた浴衣が出てきてね。高木くんって以外と男前だから、似合うと思うわよお。」

佐藤の母は、動揺のあまり固まってしまった高木の肩をバシバシ叩きながら、嬉しそうに高木を中へと招き入れる。

以外と、の部分に何か引つ掛かるものを感じながらも高木は佐藤の母に促されるままに中に入った。

有無を言わさぬ笑顔で高木を脱衣所へ案内した佐藤の母は、タオル

と一緒に丁寧に畳まれた白い布を差し出す。

「はい、タオルと襦袢。お風呂から上がったならこれ着てね。左を上にして衿を合わせて、この紐で結ぶのよ。解る？」

高木はよく回らない頭で必死に母の言葉を反復する。

「あ、大丈夫です。多分。」

高木はあははと愛想笑いを浮かべる。

「もし解らなかったら遠慮なく呼んでね。」

再びにこりと微笑んで、佐藤の母はぱたんとドアを閉めた。

ぱたぱたと佐藤の母の足音が遠ざかっていくのを確認して、高木は盛大な溜め息を吐く。

まだどきどきしている心臓に手をやり、数回深呼吸する。

いくら娘の彼氏だとはいえ、まだ婚約もしていない男を風呂に入れていいのか？

高木は思わず首を捻る。

あまりにも以外な展開すぎて、頭がついてこない。

再び高木は深い溜め息を吐く。

いいんだろつか、としばらく自問自答した後、3度目の大きな溜め息を吐くと、高木は持っていたタオルと襦袢を脱衣籠に放り込んだ。

### 3 ・それで良いの？（後書き）

美和ちゃんのお母さん登場！茶目っ気たっぷりの佐藤母は、高木くんがお気に入りですよ。

#### 4・イケてる？

風呂から上がると、高木は言われた通りに襦袢に袖を通す。

風呂場で悶々と考えを巡らせていたせいで、ややのぼせぎみの頭をフル回転させ、佐藤の母の言葉を思い出しながら衿を合わせ、紐を結ぶ。

たったそれだけの事なのに、何故か神聖な気持ちになるのは、着慣れない襦袢のせいなのか、はたまたこの襦袢が佐藤の父のものだからなのか、その時の高木には判らなかった。

それなりに身繕いをして、さつき脱ぎ捨てたスーツやらシャツやらを大雑波にまとめ、小脇に抱えると、高木は脱衣所を後にする。

居間に入ると、すっかり身繕いを整えた佐藤は座ってテレビを見ていた。物音に気付いて振り返り、高木の姿を確認すると、にこりと微笑む。

「涉くん、お疲れさま。結構早く抜けれたのね。」

佐藤はゆっくりと立ち上がり高木の前に来ると、

「どう？結構イケてるでしょ？」

と、嬉しそうに浴衣姿を見せびらかす。

藍に色とりどりの朝顔をあしらった艶やかな浴衣がその白くきめ細かい肌をより際立たせる。普段の佐藤とは違う、匂い立つような色香が高木の目を釘付けにする。

高木は思わずごくりと息を飲んだ。

「涉くん？どうしたの？変、かな？」

何も言葉を発せずただ立ち尽くす高木の顔を佐藤が戸惑いがちに覗き込む。

高木ははっとして慌てて首をぶんぶん横に振ると、上擦った声で答えた。

「いえ、あの……すごく似合ってます！めちゃくちゃ可愛いです！」

言ってしまったから、高木の顔はみるみる赤くなった。

つられて佐藤の顔も耳まで真っ赤に染まる。

「あ、ありがとう。」

聞き取れないくらい小さな声で佐藤が呟く。

何だか気恥ずかしくなった二人は無言でその場に立ち尽くした。

## 5・からかわれてる？

「あらあら。二人して何やってんの。妬けるわねえ。」

突然、居間の扉が開いて佐藤の母が顔を出す。

佐藤と高木は思わず互いに顔を見合わせ、あははと愛想笑いを浮かべた。

「美和子ったら高木くんに愛の言葉でも囁いてもらってたの？真っ赤な顔しちゃって。」

佐藤の母は、娘をからかうようにふふんと笑う。

「なっ！そんなんじゃないわよっ！」

耳まで真っ赤に染め上げた佐藤は、ムキになって反論する。

「そっ、そうですよ。そんなんじゃないですっ。」

高木もしどろもどろになりながら慌てて加勢する。

佐藤の母はそんな2人を楽しそうに見つめ、唇の端に含み笑いを浮かべると、どうぞ、とお盆に乗った麦茶をテーブルに置いた。よく冷えて水滴を浮かべたコップの中で、からんと氷が音をたてる。

高木は慌てて礼を言うと、コップを取り上げ一気にその中身を飲み干した。冷たさが火照った身体を心地よく冷ましていく。

佐藤の母はふふと肩を震わせて笑いを囁み殺すと、

「高木くんって面白いわぁ。そんなに焦らなくてもいいのに。」  
墓穴掘ってるわよ、と茶目っ気たっぶりの目で高木を見る。

もしかしてオレ、からかわれてるのか？

頭の中に疑問符が飛び交うより早く、

「あ、いえ、その・・・すみません。」

無意識のうちに高木はいつもの癖で、つい謝ってしまっていた。

そんな高木の慌てっぶりに、とうとう佐藤の母は声を上げて笑い出す。

「高木くんってほんと面白いわねえ。からかいがあるっていうか。」

佐藤の母は高木の背中をバンバン叩きながら、涙を流さんばかりに大ウケしている。

高木はただただ困ったような顔で頬を掻きながら立ち尽くしていた。そんな2人を交互に見つめながら佐藤が呆れたように言う。

「おかーさん。高木くんをからかうのはそれくらいにして、早く浴衣着せてあげてくれる？」

佐藤の助け舟に、高木はほっと胸を撫で下ろした。

## 6・母への誓い

「美和子の浴衣姿、どうだった？」

ダイニングに連れて来られた高木は、突然の質問に内心焦った。

ここは何と答えればいいのだろう。正直に思った事を言ってしまった方がいいのだろうか。

少しの間、頭の中で思考を巡らせてから、高木は答える。

「すつごく綺麗でした。いつもと違う、何て言うか、その……」

言いあぐねている高木をよそに、佐藤の母はしれっと高木が躊躇したその言葉を発した。

「色っぽかったでしょ。」

高木は思わずぎょとした顔で佐藤の母を見る。

「美和子ねえ、あなたと付き合うまでは本当、これでもかってくらい色気もへったくれもない子でね。恋愛なんてとんでもないって感じで。まあ、親としては心配だったのよ。この子、大丈夫かしらって。」

佐藤の母は苦笑しながら高木を見上げる。

「でもね。ある時から美和子、変わったのよね。なんていうか、女の部分が出てきたっていうか。」

多分あなたに恋してるからなのよね。と佐藤の母は笑う。

「高木くんに出会って、恋して、愛されて。あの子にとってあなたはきつと自分の中の一部、かけがえのない存在なんだと思うの。だから……」

あんな娘だけど、これからも愛してあげてね。と佐藤の母は、母親の目をして微笑んだ。

高木は突然の事に驚いた。

しかし、一方で冷静にその言葉を噛み締める自分がいた。

高木は照れ臭そうに微笑むと、はっきりと答えた。

「任せて下さい。それだけは誰にも負けない自信がありますから。」



## 7・つれない態度

リビングに戻ると、佐藤は頬杖をつき、険しい顔でテレビを見ていた。

「あのう・・・お待たせしました。」

そんな佐藤に怪訝な表情を浮かべながら、怖ず怖ずと高木は声を掛ける。

「どう美和子、高木くん、浴衣似合うでしょ？」

高木の後ろからひよいと顔を覗かせ佐藤の母が嬉しそうに笑う。

その言葉に佐藤はぐいと顔をこちらに擦じ曲げ、それこそ高木の頭のとっぺんから爪先までじろりと一通り見回すと、

「まあまあね。」

ふいつと顔を背けぶつきらばうに答えた。

その顔は怒っているようにういてささやかに頬が赤くなり、拗ねた子どものように唇を尖らせている。

困り顔で佐藤の母の方に首を捻ると、佐藤の母は面白そうに笑っている。

「拗ねてんのよ。まったく素直じゃないんだから。」

高木は、はあ、と解ったような解らないような曖昧な笑みを浮かべて頷く。

その時、突然がたと音を立て、勢い良く佐藤が立ち上がった。

びくりと肩を竦める高木をじろりと睨みつけると、

「ぐずぐずしてないでさっさと行くわよ。花火、間に合わなくなっちゃうじゃない。」

机の上に置いてあった巾着を乱暴に掴み、俯きがちにつかつかと高木に歩み寄ったかと思うと、力いっぱいぐいと袖を引っ張る。

「えっ？あの、美和子さん？」

佐藤が臍を曲げている理由が掴めず、あたふたする高木の方を一瞥する事も無く、佐藤はただ力づくで高木を引っ張って行く。普段か

ら犯罪者と格闘することが多いせいか、そんじよそこらの女性より格段に力強い佐藤に引きずられるように、高木は後に続いた。

その俯いた佐藤の黒髪の隙間から覗いた耳たぶが真っ赤に染まっていることに気付いて、高木は何だかほっとする。

見送る佐藤の母との挨拶もそこそこに、首根っこを掴まれ身動き出来ない猫のように情けない顔で、高木は玄関の外へ押し出された。ずんずんと物凄い勢いでエレベーターホールまで引つ張って行かれながら、高木は目を白黒させて佐藤の背中に問い掛ける。

「あ、う、美和子さん？オレ、何かしましたっけ？」

すると、佐藤は振り向きもせずにはそりと呟く。

「した。」

高木ははてと首を捻る。

佐藤は何故怒っているのか。自分が機嫌を損ねるような何をしでかしたというのか。

思い当たる節が全くと言っていい程見つからず、とうとう高木は途方に暮れる。

「えっと・・・オレ、何したんすかね？」

困惑ぎみの笑みを浮かべながら、遠慮がちに尋ねる。  
しばしの沈黙。

立ち止まり、俯いたままで、佐藤はぼそりと答える。

「お母さんに何か言われたでしょ。」

不意に想定外の質問をされて高木は焦る。さっき風呂に入ってさっぱりしたはずの背中に生温い汗が滲む。

「あ、いや、別に何も・・・」

引き攣った笑みを浮かべながら答えた声は、明らかに上擦っていた。しかし、佐藤が高木に投げつけた答えは意外なものだった。

## 7・つれない態度（後書き）

長い間更新してなくてすみません。続きを楽しみにして下さってる方、申し訳ありませんでした。これからも当分の間はぼちぼちの更新になるとと思いますが、よろしければお付き合ってくださいませ。

## 8・意地っ張りな彼女

「高木くんって案外たくましいのねえなんてべたべた触られてた癖に。」

佐藤はくるりと振り向くと、ぷうつと頬を膨らませ、唇を尖らせる。  
「は？いや、別にべたべた触られてはない・・・ですけど。」

高木はきよとんと瞳を見開き答える。

「もしかして、妬いてるんですか？」

まさか自分の母親にやきもちを妬いてるとは予想もしていなかっただけに、高木は呆然と聞き返す。

「だってお母さん、涉くんの事好きだから。」

相変わらずのふくれっ面で、俯きがちに佐藤が答えになっていない答えを呟く。むうつと眉間に皺を寄せて佐藤は床を睨む。

「自分でも分かっているの。母親にやきもちやくなんでどうかしてるって。」

でもむかつくんだもんっ、と佐藤はきっぱりと言い放つ。なんか文句ある？と言わんばかりに上目使いで見上げてくる佐藤があまりにも愛らしくて、思わず顔が緩む。

「何よ？」

怪訝な顔で佐藤がこちらを睨みつける。その姿でさえも愛おしくて、高木はますます笑んでしまう。

「だから、なあにつ？」

理由も言わず、ただニヤニヤと笑っている高木の頬を、無表情の佐藤がおもいつきり摘む。

「痛っつ！！！」

余りの痛さに高木は思わず悲鳴を上げた。

「自業自得よ。」

佐藤が手を離し、ぷいっと素っ気なく顔を逸らしたところで、エレベーターが到着する。

佐藤は何事も無かったかのようにその箱の中に乗り込んだ。

「早く乗りなさいよ。」

赤くなつた頬を摩りながら立ち尽くす高木に冷たい視線を向け、怒気を含んだ刺々しい声で佐藤が促す。

「あ、はい。すみません……」

慌てて答えて、恐る恐る佐藤の隣に乗り込む。

静かにドアが閉まり、2人きりの狭い箱の中は重苦しい空気に包まれた。

「……嬉しかったですよ。」

その嫌な空気を破るように、高木はぼそりと呟く。

「オレ、やきもちやきの美和子さんも好きですから。」

さりげなく言つたつもりが妙にこの窮屈な空間に響いたような気がして、急に気恥ずかしくなる。ぽりぽりと頬を掻きながらごまかし笑いを浮かべる高木を、佐藤は呆れたような顔で小さく睨むと、

「馬鹿。」

まんざらでもないと言つた様子で呟いた。

「すみません。」

あははといったもの愛想笑いを浮かべながら詫びると、

「別に謝ることないじゃない。」

佐藤はふつと相好を崩し、柔らかな笑顔で高木を見上げる。

「似合つてるわよ。浴衣。」

微かに頬を染めて佐藤が呟く。甘えたように華奢な手でそつと高木の手を取り、ちよつぴり背伸びをして少し背の高い高木の耳元に唇を寄せる。

「なかなかカッコイイんじゃない？惚れ直しちゃった。」

悪戯っぽく囁く佐藤の言葉に、高木の頬はみるみる真っ赤に染まつた。

程なくしてエレベーターが地上へと辿り着くと、

「ほら、早く。」

佐藤は子どものような無邪気な笑顔で高木の手を引いた。

## 8・意地っ張りな彼女（後書き）

年内最後の更新です。来年も頑張って更新しますので、よろしくお  
願いします！

## 9・父との思い出

すっかりご機嫌の直った佐藤は高木の手を引きながら、他愛のない話に表情を綻ばせる。

職場では余り感情の起伏を表に出さない佐藤だが、高木と二人きりの時にはそれを剥き出しにしてぶつかってくる。笑ったと思ったら突然怒り出したり、ちよっぴり泣き出しそんな顔をした次の瞬間にはもう笑っていたり。目まぐるしく表情を変える佐藤に振り回されながらも、高木はそんな彼女がとてつもなく愛おしいと感じるのだ。刑事という仕事柄どうしても押し殺しがちになってしまふ己の感情を安心して吐き出せる。殺伐とした刑事の世界で生きる佐藤にとって自分がそういう存在で在るのだということが、今の高木にはただ嬉しい。そしていつまでもそんな存在で在り続けたいと願って止まない。

「ねえ涉くん、聞いてる？」

不意に佐藤が立ち止まり、やや不満げな顔で高木を見上げる。

「ん？聞いてますよ？」

高木は穏やかな笑みを浮かべて佐藤を見遣る。疑いを含んだ黒目がちな瞳をぱちぱちと数回瞬かせ、ならいいけど、と佐藤は拗ねた子どものように唇を尖らせ、ふいつとそっぽを向く。

「本当にちゃんと聞いてましたよ。」

高木は苦笑しながら佐藤の顔を覗き込む。安心させるようにぽんぽんと空いている右手で頭を撫でてやると、佐藤は心地よさそうに目を細め嬉しそうな顔をして呟く。

「涉くんの手って大きくてあったかくて、お父さんの手みたい。」

幼くして亡くした父の面影を追うかのように少し遠い目をして佐藤は大好きな父との思い出をぽつりぽつりと語り出す。

「私がまだ小学校に上がったばかりの頃だったかな。お父さんが珍しく早く帰ってきてね。花火大会に連れてってくれたの。」

お父さんと出かける事なんて滅多に無かったから嬉しくてね。学校の事とか、友達の事とか、いっぱい話したなあ。仕事で疲れていたはずなのにお父さんは嫌な顔ひとつしないでにこにこしながら聞いてくれてね。ただそれだけの事なのに凄く嬉しかったのを覚えてる。大好きな父と浴衣を着て手を繋ぎ、はしゃぎ回る幼い日の佐藤の姿が目に残る。

「あの日は凄く暑かったな。その年一番の真夏日でね。汗だくになりながら夜店を回って、花火を見て。もともととお父さんと話したかったのに、はしゃぎ過ぎたのかなあ。花火が終わる頃には眠っちゃって。朝、目が覚めたらお父さん、もう仕事に行っちゃって居なかったんだ。」

少し淋しそうな笑みを浮かべて佐藤は父との思い出を振り返る。

「あれが最初で最後だったな。お父さんと一緒に夏祭りに行ったのは。」

ぽつりと呟き、佐藤はぎこちない笑顔を作ると高木を見上げる。

「湿っぱい話しちゃってごめんね。」

今にも泣き出しそうな佐藤が愛おしくて、高木は繋いだ手を強く握る。

「お父さんもきつと嬉しかったと思いますよ。」

月並みな言葉しか出てこない自分がもどかしくて、高木は胸がきゅうつと痛くなる。それ以上何も言えなくて、高木は思わず佐藤の華奢な体を引き寄せた。通り過ぎる人の目などまるで気にならない。ただ佐藤の胸に込み上げる思いを包み込んであげたかった。

すっぱりと腕の中におさまった佐藤の肩は微かに震えていた。高木は柔らかな髪を梳き、そっと背中を撫でる。見慣れているはずのその背中がやけに小さく思えた。



## 9 ・父との思い出（後書き）

相変わらずスローペースの更新ですみません・・・

## 10・逃げ場のないかくれんぼ

いつもは毅然として何者も寄せ付けないような強さを放つその背中が、すっぽりと自分の腕の中に納まっている。それは高木にとってなんとも不思議な感覚だった。何度経験しても慣れない照れ臭さと安堵感。それらが入り混じり、高木を何だかくすぐったい気分させる。佐藤が無条件に頼ってくれる。その事が高木にとっては嬉しくて仕方なかった。

「ごめんね。泣くつもり、なかったのに。」

ぽつりと消え入りそうな声で佐藤が呟く。まだ涙が止まらないのか高木の胸に顔を埋めたまま小刻みに肩を震わせる。

「いいんですよ。泣きたい時は思いつきり泣いた方が。」

気の利いた言葉のひとつでも言えたら少しは佐藤の心も軽くなるのかも知れないが、生憎ちつともそれらしい言葉は浮かんでこない。

今の高木にできることと言えば、佐藤の微かな嗚咽が止まるまでただその華奢な背中をゆっくりゆっくりさすり続けることだけだった。

「あつれー？ねえ、あれ高木刑事じゃない？」

不意に背後から聞き覚えのある声がして、高木の鼓動はびくりと跳ね上がる。その愛らしい声の主は、振り向かずとも予想が付く。おそらく見つかつてしまったのだ。あの子達に。

「あら、他人の空似なんじゃない。あの高木刑事がこんなところで女の人と抱き合ってるはずないと思うけど。」

どこことなく棘のある言い草に苦笑を浮かべながらも、なんだか空恐ろしくて振り返ることさえできない。

「そうだよ。あいつにそんな度胸があるわけねーだろ。」

散々な言われようだな、オレ。とがつくり肩を落としながらも、このピンチをどうやって切り抜けようかと高木は必死で頭を捻る。

「そうですよ。それに、あのふたり浴衣を着ていますし。忙しい高木刑事がわざわざ仕事を終えてから浴衣に着替えて花火大会に来る

なんて、考えにくいですよ。まあ花火大会に来るためにあらかじめ休みを取っていたのなら話は別ですが。」

ここまで言われると、何だかものすごく悪いことをしているような気分になってしまふ。いや、別にやましい事など何ひとつ無い筈、なのだが……

「おい、おめーら。あんまりジロジロ見るんじゃないよ。」

やや大人びた少年の声がして、高木はほっと胸をなでおろす。

「そうね。子どもが大人の色恋沙汰を覗き見るなんて、いい趣味だとは言えないわ。」

先ほど他人の空似を主張した少女がそれに賛成する。何故だか分からないが、これで何とか無事にやり過ごせそうに思えた。

「でもお。」

言いだしっぺの少女が納得いかないといった様子でまだこちらをじっと伺っているのが背を向けていても分かる。

「やつぱりあれ、高木刑事だよ。それにあの女の人。佐藤刑事じゃない？歩美、ちょっと見てくる。」

少女はきっぱりと言い放つと、

「おい、歩美っ！」

少年達が止めるのを振り切り少女がこちらに向かって駆けてくる気配がした。

高木は盛大な溜息を吐くと、あははと苦笑いを浮かべた。

## 10・逃げ場のないかれんぼ（後書き）

シリアス路線の前回から一転してラブコメ路線に戻ってきました。  
とうとう見つかったやいましたよ、彼らに（笑）高木君、次回迄に  
頑張って言い訳考えてくださいね！ あくまで他人事

## 11・涙の理由

高木は苦笑を貼り付けたまま酸欠でくらくらする頭を必死に働かせようと試みる。

警察官という社会の安全と秩序を守る立場にありながら、柄にも無く公衆の面前で堂々と佐藤を抱きしめてしまった事をひそかに悔やんでみたりする。

だがそれも後の祭りというものだ。

ただ、楽しかった父との思い出に涙する佐藤を愛おしいとか、守りたいとかいう思いが強くて。あの時は考えるより先に体が動いてしまっていた。佐藤の寂寥の思いを包み込んであげたくて、思わず抱きしめてしまった。自分に出来る事が他には思い付かなくて。でも、あの子達にそんな事を説明したところで、きっと難しすぎて理解出来ないに違いない。

何か良い言い訳を考えなきゃな。

一瞬の間にいろいろな事を考えて。

結論が出ないうちに高木はその声を聞いた。

「あーっ。やっぱり高木刑事と佐藤刑事だあ。」

無邪気なその声に、高木はただただ愛想笑いを浮かべる事しか出来ない。

佐藤の方はというと、はっと顔を上げおもむろに声のした方に振り返る。視界に少女の姿を捉えると相好を崩し、柔らかな笑顔を向ける。

「あら、歩美ちゃん。こんばんは。」

佐藤が少女の目線に合わせて少し屈み込むと、少女も屈託の無い笑顔で嬉しそうに佐藤を見上げ、

「こんばんは。」

と答えた。しかし、少女は何かに気付いたように直ぐに表情を曇らせ、怖ず怖ずと目の前の佐藤に問いかける。

「佐藤刑事、泣いてるの？」

少し不安げな少女の問いかけに、佐藤は苦笑を浮かべて問い返す。

「どうしてそう思うの？」

少女は一瞬答えに迷ったように俯くと、小さな声で呟く。

「だって、佐藤刑事の目、キラキラして泣いてるように見えたんだもん。」

少女の答えに佐藤はふっと困ったような顔で笑う。

「参ったなあ。さすが歩美ちゃん。少年探偵団の目はごまかせないわね。」

佐藤は小さく息を吐くと、歩美の疑問に答えを返す。

「小さい頃お父さんと来た時の事、思い出しちゃってね。思わず泣いちゃったの。だから高木君が周りの人に私が泣いてるのを見られないように隠してくれてたのよ。」

でももう大丈夫よ。心配してくれてありがとう。と佐藤は心優しい少女に向かって微笑む。その笑顔がとても綺麗で高木は思わずどきりとする。と同時に佐藤に全て説明させてしまった自分が不甲斐無く思えてがっくりと肩を落とした。

「そっかあ。高木刑事、優しいね。」

歩美は愛らしい笑みで高木を見上げる。

高木はぽりぽりと頭を掻きながら相変わらず困った笑みを浮かべる事しか出来なかった。

## 11・涙の理由（後書き）

結局高木君は一言も発せないまま・・・やっぱり佐藤さんの方が肝が据わってるって事でしょうか？

## 12・不幸中の幸い？（前書き）

長期間連載ストップしておりまして申し訳ありません。いよいよ連載再開です！！



## 12・不幸中の幸い？

佐藤の説明が何の矛盾もなく的確だったせい、歩美は高木が思った以上にあっさりとその場の状況を理解してくれたようだ。もしこの状況を高木が説明していたら、いくら素直で利発な歩美でもここまですんなりと納得してくれたかどうか分らない。それどころか不用意な発言の多い高木のことで、弁解するのに必死になって、ついつかりしゃべってしまったことが、もしかしたら取り返しのつかない事態を招いていたかもしれない。

なんとかピンチを切り抜けたと安堵の息を吐いたのもつかの間、高木の脳裏に嫌な記憶が甦った。先程引いた筈の嫌な汗が、再び背中を伝う。高木はちらりと佐藤の横顔を盗み見た。それに気付いて佐藤が不思議そうな顔で高木を見上げる。

「何？どうしたの？」

小首を傾げて尋ねる佐藤に、

「い、いえ、別に……」

高木は慌ててぶんぶんと首を左右に振った。

もっと手強い相手が残ってるんですよ、美和子さん……でも、さすがにそれを口にするには出来なかった。余りにも恐ろしすぎて。

そう、高木と佐藤が抱き合っているのを目撃した子供は恐らく5人その中でも最も素直な性格の歩美を納得させる事はできたが、他の4人はどうなのだろう。いや、あと二人。あの少年達ならまだ佐藤が歩美に説いた理由で納得させることが出来るような気がする。しかし、あの二人はどうだろう。妙に大人びたあの少年と少女は。

恐らく無理だろうな……

大人顔負けの観察眼を持つ少年と、常に冷静で大人びた発言をする少女の顔を思い浮かべ、高木は盛大な溜め息を吐き出した。

自分達が抱き合っているのを目撃した子供が他にもいるなんて微塵も気付いていない佐藤は相変わらず歩美と談笑している。ここだけ見れば微笑ましい光景なのになあ、と高木が思わず苦笑を漏らしたその時、とうとう佐藤が触れてはならない話題を口にした。

「歩美ちゃん、今日はお母さんと一緒に来たの？」

佐藤の問いに、歩美は愛らしい笑みを残したままふるふると首を左右に振る。

「ううん。少年探偵団のみんなと一緒にだよ。ほら。」

歩美は高木の後方で遠巻きに様子を伺っている4人の子ども達を指さす。

「あ、ホントだ。」

佐藤は少し困ったような笑みを浮かべて呟き、立ち尽くしている高木をちらりと見上げた。おそらく佐藤も先程高木が考えていたのと同じ事を思ったに違いない。高木も苦笑を浮かべたまま佐藤を見る。二人の大人の複雑な笑みに全く気付いていない歩美は、無邪気な笑顔でそちらに向けて大きく手招きをした。

## 12・不幸中の幸い？（後書き）

長期間にわたって連載を中断しておりまして申し訳ありません。本日より連載を再開させて頂くことになりました。久しぶりに書いたので、文体とか作品の雰囲気とかが微妙に変わっているような気もしないではないですが、その辺はおいおい修正させていきたいと思いますのでご容赦下さい。面白い作品になるよう頑張って書いていきますので、またお付き合いいただけると嬉しいです。

### 13・本当の事

「ほらね。歩美の言った通りでしょ？」

駆け寄ってきた少年達を前に、歩美は得意げに胸を反らした。

「ホントだ。さっすが歩美ちゃん。良く判りましたね！」

光彦が興奮した面持ちで歩美を褒めると、

「歩美、すっげーなあ。俺、ちつとも判らなかつたぜ。」

元太が感嘆の声を上げる。

高木と佐藤が抱き合っていた理由などそっちのけで歩美を誉めたてる少年達に高木がこっそり胸を撫で下ろしたのも束の間、呆れ顔の少女がこちらを見ながら冷め切った声で聞こえよがしにぼつりと呟いた。

「さすが吉田さんね。まさかこんなところで浴衣姿の刑事が抱き合ってるなんて、誰も想像しなかったもの。」

皮肉めいたその言い草に、高木は己の頬が引き攣るのを感じた。ちらりと隣に視線を遣ると、同じく苦笑を浮かべた佐藤と目が合う。さて、どうやって言い訳しようかな。

回らない頭で必死に考えていると、5人の中で最も頭の切れる少年がおもむろに口を開いた。

「まあ、張り込み中にばれそうになって慌てて恋人のフリをしたって事も考えられるけど。」

少年は口元に含み笑いを浮かべながら浴衣姿の二人を見上げる。

「身動きの取りにくい浴衣姿で張り込みする刑事ってのも不自然だよね？」

明らかに何かを悟っているであろうその口ぶりに、高木は狼狽する。参ったな。やっぱりこの二人、一筋縄ではいかないな。

心の中で大いに嘆息を吐き出すと、高木は決意を固め、腰を屈めて二人に目線を合わせた。

「確かに今日は仕事で来たんじゃないんだ。」

佐藤のように上手く説明できるかどうかは解らないが、説明しないわけにもいかないだろう。自分なりの言葉できちんと説明すれば、この二人なら納得してくれそうな気がした。

「仕事が早く終わったからこうして花火を観に来ただけだ。」

一旦言葉を区切ったところで、ちらりと佐藤を見上げる。口元に柔らかな笑みを浮かべた佐藤がこくりと頷くのを確認して、高木はその先を切り出した。

「君達も知ってるだろう？佐藤さんのお父さんの事。」

突然の問い掛けに、二人は無言で頷いた。この二人も佐藤が幼少の頃、捜査中の事故で父を亡くした事を知っている。そして、彼が追っていた事件の真相も。

高木が切り出したその言葉で勘の良い二人は何かに気付いたのだろう。真っ直ぐな瞳で高木の瞳を見る。

「この花火大会は佐藤さんがお父さんと一緒に来た最初で最後のお祭りだったんだ。」

高木の言葉に二人は弾かれたように佐藤を見上げた。佐藤は少し悲しげな笑みを浮かべてその先を続ける。

「今日みたいに浴衣を着せてもらって、夜店を回ってね。一緒に出かける事なんて滅多になかったから、すっごく嬉しくて。高木くんが着てる浴衣ね。その時父が着てたもののなの。」

だから思い出しちゃって。その時の事。

呟いた佐藤の瞳が僅かに揺れたのを見て、二人の表情が曇る。

「君達にも解るだろう？自分の大切な人が悲しい時、辛い時、少しでもそれを分かち合いたいと思う気持ち。」

難しすぎるかな？

高木の静かな問い掛けに二人は穏やかな笑みを浮かべて首を横に振った。

### 13・本当の事（後書き）

哀ちゃんとコナン君のキャラが・・・微妙ですね（汗）少年探偵団と高佐の絡みは好きなんですけど、自分で書くとなると難しいです。次話からもしばらくこの絡みが続くので、頑張りたいと思います。

## 14・夜店巡り

「そういうの、あなたらしくて良いんじゃない？」

先程までのどこか棘のある言い方とは違う優しい口調で哀が呟く。

いつも大人がたじろぐようなクールな台詞を吐く彼女の口から肯定的な言葉を聞けた事で、一先ず高木は安堵の息を吐いた。

とりあえず納得してくれたみたいだな。

緊張が解け、ほっと胸を撫で下ろした次の瞬間、

「あなたのそういうところが彼女も好きなんじゃないかしら？」

突然どきつとするような台詞をさらりと小声で吐いて、哀はちらりと佐藤を見上げた。

「なっ！ちよっ、哀ちゃん！？」

恐らく耳まで真っ赤になっているであろう高木は、酸欠の金魚よろしく口をパクパクさせた。

「ん？何？どうしたの？」

先程哀が発した言葉は佐藤の耳には届いていなかったらしい。自分に向けられた視線に気付いて、不思議そうに首を傾げる。

「何でもないわ。」

動揺を隠せない高木を他所に、哀は短く返事を返した。目の前で慌てふためく高木に再び視線を戻すと、哀はくすりと大人びた笑みを浮かべる。その様子をコナンが苦笑がちに見つめていた。

「そう。」

佐藤は一瞬怪訝な顔を覗かせたものの、さほど気にする様子も無く子供達の顔を見回す。

「ねえ。花火が上がるまでまだ時間もあるし、みんなで夜店巡りでもしましょうか。」

佐藤が屈託の無い笑顔を向けると、

「賛成！」

子供達から歓声が上がった。

もともと子供好きな佐藤は、このまま彼らと一緒に夜店巡りをするつもりだろうだ。久しぶりに二人きりでデート出来るのを楽しみにしていた事もあって、少々残念な気もしたが、無邪気にはしゃぐ子供達を見ているとそれもいいかと思えた。なんだかんだいって高木も子供が好きなのだ。

「俺、イカ焼き食いてえな。」

元太が満面の笑顔を浮かべて指差す先には、屋台が所狭しと並んでいる。そこから漂ってくる香ばしい匂いは、まだ夕食を済ませていなかった高木の腹を確実に刺激した。その途端、先程まで全くと言つていいほど感じなかった空腹感が一気に押し寄せる。

軽く腹ごしらえでもしておくか。

高木が心の中で呟いたその時、

「元太君、まだ食べるんですかあ？さつきそこでクレープ食べたばっかりでしょう？」

呆れ顔の光彦が嘆息を吐いた。

「その前は確かフライドポテトだったな。」

冷めた声でコナンがつっこむと、

「あら、焼きそばも食べてたような気がするけど？」

哀が横目でちらりと元太の腹を睨む。

「だってよー。腹減ってるんだから仕方ねーじゃねーか。」

唇を尖らせて何とか反論の声を上げた元太に歩美が頬を膨らませ、とどめの一撃を刺した。

「元太君、お家で晩御飯、食べて来たんでしょ？食べすぎだよ。今度は金魚すくいしようって約束したじゃない。」

途端に元太は言葉に詰まる。

「まあまあ。確かに元太君は少し食べ過ぎかもしれないけど、僕もお腹が減っているからちようど何か食べたいなあと思ってたんだ。」  
高木はなだめるようにしてその間に割って入ると子供達の顔を交互に見回した。

「だからさ。僕と元太君はイカ焼きを買いに行つて来るから、みんな



なは佐藤さんと金魚すくいをしてきたらどうか？」

高木の提案に、子供達は一様に顔を綻ばせ、頷いた。

その様子を見つめる穏やかな佐藤の笑顔が、まるで母親のそれのよう  
うで、高木の鼓動は静かに跳ねた。

#### 14・夜店巡り（後書き）

相変わらずのスローペース更新で申し訳ありません。今回はコナン君&哀ちゃん、キャラ崩壊しないよう頑張りました（苦笑）もうしばらくこの絡みが続きますので（ということとは、ラブコメ路線だな・  
・・）頑張りたいと思います。

## 15・事件の前の静けさ? (前書き)

いつもお待たせしておりますすみません。

## 15・事件の前の静けさ？

「早く食いてーなあ・・・」

屋台から漂ってくる美味しそうな匂いに腹の虫を刺激されながら列の最後尾に並んだ高木は、今にもよだれを垂らさんばかりの表情でぼつりと呟いた少年に思わず笑みを向けた。

他の子供達に比べるとやや大柄な少年だが、中身は歳相応の幼さを残している。

いや、ある意味一番子供らしいのは、もしかしたら彼かもしれない。思ったことを素直に口にする無邪気さは、紛れもなく子供特有のそれ。

いつも余計な事にまで思考を巡らせてしまう『大人』の高木にとつてはそれが堪らなく眩しい。いや、他人に言わせれば高木もかなり素直に思ったことを口に行っているらしいのだけれど。

「元太君、そんなにお腹が減っているのかい？」

いくら育ち盛りだとはいえ、自宅で夕食を食べてきた上に、先程クレープとポテトと焼きそばを平らげたという少年の旺盛すぎる食欲に少々驚きを覚えつつ尋ねた高木に、

「しょーがねーだろ。博士んちから此处までみんな歩いて来たんだからよー。」

少年は口を尖らせてぼやいた。

「花火が始まるまで店を見て来てもいいって博士が言うからよー。ちゃんと腹ごしらえしとかねーと。」

突き出た腹を撫でながら、さも当然の事のように呟いた少年を、高木は怪訝な顔で覗き込む。

「という事は、今日は阿笠さんも一緒なのかい？」

考えてみれば当然のことだ。この子達はまだ小学1年生。普通ならこんな時間に子供達だけで出歩くような事は無いだろう。その証拠に先程佐藤も歩美に尋ねていたではないか。「お母さんと一緒に来

たの？」と。そんな事は今の今まで高木の思考の中からすっかり抜け落ちてしまっていたけれど。

まあ、この子達の場合は少々特別だから、子供達だけで此処に来ていたとしても、さして不思議ではないような気もするのだが。

「ああ、博士なら河川敷で場所取りしてるぜ。」

元太がきよとした顔で答えるのを、高木は苦笑がちに聞いた。

「そっか。」

だからあの時。

高木が佐藤を抱きしめたあの時、あそこには彼らしか居なかったのか。

彼らにそれを見られたと知った時には心臓が止まりそうになるくらい動揺してしまっただけ。今となって思えば、あの場に居合わせたのが子供達だけで良かったような気がする。

もし、あの場面を阿笠にまで見られていたら。恥ずかしすぎて、とてもでは無いが今のようになんか保っている事など出来ないだろう。ふと自分のらしくない先程の行為を思い出し、背中に再び冷や汗が伝う。

高木は元太に気付かれないように、こっそりと息を吐いた。それは安堵の息にも似た溜め息だった。

「おい。」

不意に強い口調で元太に呼ばれ、高木の心臓は大きく跳ね上がる。

「ん？なんだい？」

努めて何でも無い風を装いながら、高木はいつもの困ったような笑みを浮かべて少年を見た。

もしかして、気付かれたかな。

こっそりと心の中で呟いた疑問は、あっさりと否定される事となる。「何本買ったんだよ？」

予想外の質問に「へっ？」と間の抜けた声を漏らし、ふと前方に目を遣る。高木と元太はいつの間にか列の先頭に押し出されていた。

「あ……えーっと……7本。いや、8本かな。」

直ぐさま頭の中で人数分を数えて答える。子供達が5人に高木と佐藤、そして河川敷で場所取りをしているという阿笠の分で合計8本。間違いは無い筈だ。しかし、元太は何を思ったか素つ頓狂な声を上げて高木を見上げた。

「ええっ！8本？確かに腹は減ってるけど、俺、そんなに食べねーぜ。」

どこまでも無邪氣すぎる少年に思わず苦笑が浮かぶ。

「いや、君達少年探偵団の分と、僕と佐藤さん、それに阿笠さんの分だよ。全部で8人。間違いないだろう？」

ゆっくりと言い含めるように尋ねた次の瞬間、

「誰かその男を捕まえて！」

甲高い悲鳴が周囲の喧騒を引き裂いた。

## 15・事件の前の静けさ？（後書き）

いつもダラダラ更新ですみません。誤って下書きを削除してしまつてからなかなか書き直す時間が無くて・・・って言い訳ですね。ハイ。ここのところなかなか思うように書けなくてグダグダしてますが、完結するまで頑張ります。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4820f/>

---

花火

2010年10月9日01時42分発行